

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02699

研究課題名（和文）直示動詞「行く」「来る」の母語習得に関する研究

研究課題名（英文）L1 Acquisition of Japanese Deictic Verbs Iku and Kuru

研究代表者

高梨 美穂（Takanashi, Miho）

多摩美術大学・美術学部・准教授

研究者番号：70756155

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトでは、子どもが直示動詞である「行く」「来る」をどのような過程を経て習得し、大人の母語話者と同様の理解を示す時期はいつであるのかを明らかにするため、認知言語学の使用依拠モデルの枠組みから研究を行った。研究方法は、コーパスによる縦断研究と、ビデオ実験による横断研究を取り入れ、多角的に分析した。研究結果から、「行く」「来る」の習得には個人差もあるが、一定の連続性が見られた。そして、全体的にほぼ大人と同様の使い分けができるようになるのは、10才から12才程度であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「行く」「来る」は基本語彙であると同時に直示動詞でもあるため、本研究によって、言語の基本的機能とその習得メカニズムを明らかにできる。延いては、言語と一般認知能力との関係解明にも貢献できる。この点が学術的に意義があるといえる。また、母語の習得メカニズムへの解明に繋がることから、母語話者の言語習得（国語教育）、外国語習得（日本語教育や日本語母語話者の外国語習得）等の応用言語学分野へも寄与できると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate: 1) how children acquire the deictic verbs iku, which means 'to go' in English and kuru means 'to come' in English. 2) at what age children can use the verbs as accurately as adult native speakers, by applying the theory of usage-based models in cognitive linguistics. To clarify these issues, we adopted corpus analyses and carried out some experiments using videos. The series of results, in general, indicated that the acquisition proceeded consecutively, and most children at the ages of 10 to 12 could use iku and kuru to describe motion events as accurately as adult native speakers.

研究分野：言語学

キーワード：認知言語学 ダイクシス 直示動詞 usage-based model 使用依拠モデル 言語習得 移動事象

1. 研究開始当初の背景

「行く」「来る」は、直示動詞であることから使い分けに様々な要因が関係しているという性質、また基本移動動詞であるため派生が多いなどの性質から、本動詞にとどまらず補助動詞としても長年研究が行われてきた。母語習得においても「行く」「来る」の初出は早く、使用量も多いことはわかっており、子どもが大人と同様な使用ができるようになるには時間がかかると言われてきた。「行く」「来る」は意味の拡張域も広いから、子どもは空間移動場面での「行く」「来る」の使い分けを覚えるだけでなく、時間移動などの比喩的拡張場面での使い方も覚える必要があるからだ。

空間的移動の使い分け調査実験から、小学生1年生(6,7歳)でも誤用がみられ、習得が完成していないことを示唆する研究結果(正高1999)は示されていたが、具体的な習得終了時期については明らかになっていなかった。また、これまでの言語学的視点による母語習得の研究は、コーパスを用いた研究が主流であり、そのコーパスに関しても、日本語の母語習得の言語データ自体が十分揃っているとはいえない状況であった。上記で述べた直示動詞、基本移動動詞という性質上、「行く」「来る」の言語習得を根本的に捉えるのであれば、多角的視点から分析する必要がある。そこで本研究は、「行く」「来る」の具体的な習得終了時期、習得過程と様相を明らかにするために、多角的視点による研究方法を模索し構築することからスタートした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、直示移動動詞である「行く」「来る」の母語習得のメカニズムを明らかにし、認知言語学で扱われる使用依拠モデル(Tomasello 2003)による、言語と一般認知能力との関係解明に貢献することである。

上記に記したとおり、「行く」「来る」の母語習得において、子どもが大人の母語話者と同様の使用になる時期については明らかになっていなかった。従って、本研究では、具体的に、大人母語話者同様の理解を示すのはいつ頃なのか、そして、それにはどのような過程を経るのかを解明することを目的とし、多角的手法を取り入れ研究を行った。

言語習得研究には、言語データが不可欠であるが、Childesなど一般公開されている言語データは一部あるが量的に不十分であった。このことから、本研究を通して、言語データを収集、蓄積し、文字化も進め、今後の言語習得研究に寄与することも目的とした。

3. 研究の方法

「行く」「来る」の母語習得の実態を捉えるため、多角的な視点による研究、検証を行った。主として、コーパスによる縦断研究とビデオ実験による横断研究を組み合わせた。コーパス分析では、子どもと養育者との発話の中にもどのように「行く」「来る」が使用されているかを中心的に質的、数量的分析を行った。ビデオ実験(図1,2)では、年齢別による「行く」「来る」の使用の特徴および習得完了時期の確定を中心に、質的、数量的分析を行った。



図1. ビデオ実験1

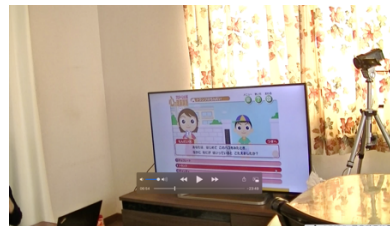


図2. ビデオ実験2

4. 研究成果

母語習得を全体的に捉えると、習得には大人からのインプットが緩やかに影響し、子どもの認知機能の発達に応じて、子どもの日常生活や志向性と絡み合いながら習得が進んでいる様子がみられた。「行く」「来る」の習得についてであるが、基本的空間移動の習得は10~12歳程度でほぼ大人と同様になることがわかった。時間的移動等の比喩的表現のアウトプットは3歳半程度から始まることはわかったが、習得完了時期の確定は、研究の範囲外であったため、今後研究を行いたい。具体的な研究結果は次の(1)~(3)のとおりである。

(1) 言語データの収集

電子データ化されていない発話の電子データ化を行い、実験の際に収集した音声の電子データ化を進めた。様々な加工が加えられるような形式を取った。また今後の研究にも結びつけられるように「行く」「来る」を抜き出した。これらは今後の言語習得研究のさらなる発展につながるものとした。

(2) 本動詞としての「行く」「来る」の習得

1歳から4歳までの年齢では、「行く」「来る」の意味をどのように習得するのか、意味習得順序を分析した。その結果、習得初期には、プロトタイプといわれる「自分のいる場所からの移動」「自分のいる場所への移動」の意味での発話のみられ、この段階では、子どもは実際の移動を意味する使用が大部分をしめ、それ以外での使用はごく限定的であることがわかった。習得に与えるインプットの影響を明らかにするため、養育者の発話にみられる「行く」「来る」の使用量と子どもの発話を比較してみたが、言語習得の初期段階においては、意味の習得においてもインプットの影響よりも、意図の力が強く働いていることが示唆された。また、「行く」「来る」のどちらを使用してもよい、交替可能なケースが多くみられ、その際「行く」「来る」のどちらが使われるかは、事態把握の仕方が大きく関係していることが示唆された。空間的移動、時間的移動の別からみると、空間的移動の「行く」「来る」の使用が4歳までは大半を占め、「春が来る」のような時間的移動を意味する表現はほとんど現れないこともわかった。

いわゆる空間的移動を示す「行く」「来る」の習得完了時期は、先行研究(正高 1999)では6歳でも誤用がみられるという研究結果であったが、これについてはビデオ実験の結果からほぼ10~12歳であることが明らかになった。7,8歳(小学校2年生)までは「行く」「来る」の使い分けに揺れがみられ、移動のタイプ(一例:図3,4)によって習得に難易度があることも示唆された。

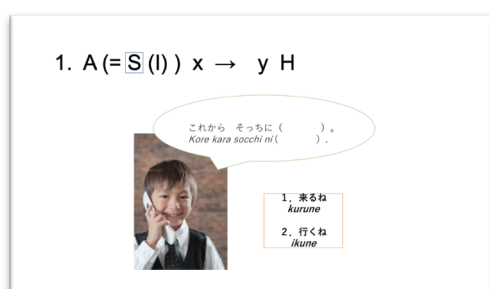


図3. 移動のタイプ1 (Takanashi 2019)

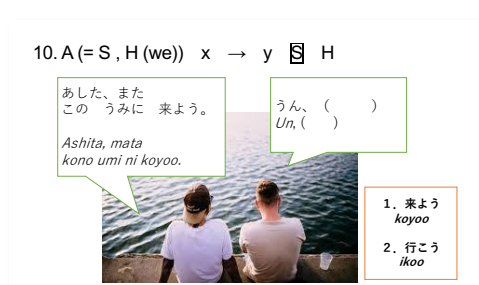


図4. 移動のタイプ10 (Takanashi 2019)

(3) 補助動詞としての「行く」「来る」の母語習得

本動詞と補助動詞での「行く」「来る」の使用率が異なるということは、先行研究(松本 2017)でも示されているが、母語習得過程においても同じような傾向が現れることがわかった。養育者と子どもの本動詞と補助動詞の使用数を比較してみると、「行く」では、本動詞での使用が8,9割程度を占め、補助動詞は1,2割程度と少なかった。しかし、「来る」では逆の現象がみられる。

「来る」の本動詞としての使用は、子ども、養育者ともに約4,5割程度で、補助動詞としての使用は5,6割程度であった。このような本動詞と補助動詞の使用の差が、「行く」「来る」の習得の妨げとなるといったマイナス的要因はみられなかった。むしろ、「行く」「来る」の本動詞と補助動詞の習得については、関連する部分も多く、相互作用によって獲得が進んでいることが示唆されるなど、一部明らかになった。その関係性については本研究では十分検証することができなかつたため、今後研究を行いたい。

<引用文献>

- ① 正高信男 (1999) 「認知と言語」『ことばと心の発達』第2巻, 229-257. ミネルヴァ書房.
- ② 松本曜 (2017) 「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜(編)『移動表現の類型論』くろしお出版.
- ③ Takanashi, M. (2019) L1 Acquisition of Japanese Deictic Verbs Iku Meaning 'to Go' and Kuru Meaning 'to Come': Focusing on Motion Event Description. Poster Presentation at ICLC15.
- ④ Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language*. Harvard University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Miho Takanashi	4. 巻 33
2. 論文標題 The acquisition of the deictic verbs iku meaning 'to go' and kuru meaning 'to come' in Japanese: From the perspective of exchangeability	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Tama Art University Bulletin 2019	6. 最初と最後の頁 145-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高梨美穂	4. 巻 19
2. 論文標題 補助動詞「ていく」「てくる」の母語獲得 - 1男児の事例から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 137 - 146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高梨美穂	4. 巻 19
2. 論文標題 補助動詞「ていく」「てくる」の母語獲得 - 1男児の事例から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本認知言語学会予稿集第19回全国大会	6. 最初と最後の頁 173 - 176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高梨美穂	4. 巻 34
2. 論文標題 動詞形の獲得と、頻度および発話意図との関係性解明に向けて：Usage-Based Theoryの観点から「行く」「来る」を取り上げて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多摩美術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 137 - 146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Miho Takanashi	4. 巻 15
2. 論文標題 L1 Acquisition of Japanese Deictic Verbs Iku Meaning ' to Go ' and Kuru Meaning ' to Come ' : Focusing on Motion Event Description	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Book of Conference, International Cognitive Linguistics Conference	6. 最初と最後の頁 152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 高梨美穂
2. 発表標題 補助動詞「ていく」「てくる」の母語獲得 - 1男児の事例から -
3. 学会等名 日本認知言語学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miho Takanashi
2. 発表標題 L1 acquisition of Japanese deictic verbs iku meaning ' to go ' and kuru meaning ' to come ' : Focusing on motion event description
3. 学会等名 INTERNATIONAL COGNITIVE LINGUISTICS CONFERENCE 15 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考